



地域日本語支援ニュース こだま 第 365 号

2019.8.8



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ AJALT 公開講座レポート ■

さだまさしが奏で、語る 日本語応援宣言

日時： 7 月 23 日 (火) 午後 7 時～8 時 30 分

場所： 東京都中野区 なかの ZERO 小ホール

2■高校進学進路ガイダンス情報 (8、9 月) ■

3■お知らせ ■

「2019 年度 日本語教師のための夏の教え方講習会」のお知らせ

====

1■ AJALT 公開講座レポート ■

講師・さだまさしさん (シンガー・ソングライター、小説家) の

「日本語教育の講座をということで参りました」と始まった、終始、ユーモアとウィットに富んだ公開講座では、日本人の心と美しい日本語について、歌詞と曲調の調和について、メッセージをいかに言葉に載せて伝えるかということ、日本社会の様々な現象と日本語力との関係、そして「風に立つライオン基金」への思いを語っていただきました。

.....

さだまさしが奏で、語る

日本語応援宣言

◇ ♪「案山子」 ◇

日本語は難しい言語ですが、表現方法が多彩で、顔色一つ変えずに自分の感

動を伝えることが可能です。日本語には人を罵るという言葉は多くはなく、それは日本が褒める社会で、日本人のホスピタリティは褒めることだからです。人の素晴らしさを伝える言葉は沢山あるけれど人を腐す言葉は好まれません。もう一つは季節感です。日本人は季節と大らかに接して生きています。季節感は日本人の感受性に強い影響を与えています。春を待つ、そんな思いをしている国はあまりない。日本は花を待つ国。花が咲きましたというのが夕方のトップニュースになる国なのです。どんなに美しい言葉を知っていても使わなければ、刻々と言葉が消えて行く。使っても聴き手が理解してくれないと、使うチャンスがなくなり、言葉がインフレになって安くなる。寂しいですね。

文芸評論家の山本健吉さんから、さだは、いなくなった人を歌うのがうまい、と言われました。いなくなった人のことを偲ぶのは挽歌と言って日本の詩歌の原点です。17音で映画一本に相当するような俳句が沢山あります。例えば、ある母親は、自分の命の危機に際しても娘のことを思う。日本人の心根の奥底にあるホスピタリティというか感受性というのか、少しも変っていないと思います。

◇ ♪「無縁坂」 ◇

この歌の中では、一言も母親が苦労したとは書いていない。でも、曲調が苦労しているから苦労したかのように受け取れる。歌詞は単語の羅列ですから、行ったこともない風景が頭の中に浮かぶというのは、受け取る側のキャパシティにかかっているのです。「愛でる」という言葉は昔からありますが、「愛してる」というのは、これは、名詞の動詞化で、戦後の日本語の傾向です。メッセージには鼓舞するような妙な説得力が欲しい。正しいかのように思わせてくれればいいのです。このメッセージをどう届けようか、どんなメロディに載せようか、随分悩んだものでした。「精霊流し」という歌は暗いので、いかに明るくお聴き頂けるかということに苦心しました。あいうえお。「う」は暗い、「お」は次に暗い、「あ」は明るい、「い」はまあまあ明るい。「あ」という発音を沢山使ったのです。

◇ ♪「関白宣言」 ◇

日本語が下手になって来ました。相手が言っていることが良くわからないというのが第一。もう一つは、自分の言いたいことが伝えられない。自分の不満を伝える言葉がないから切れる。最近の日本人の悲しい傾向です。きちん

と伝えられる言葉が用意できず、この場でどう繕っていいかわからず、パニックに陥って、カット切れてしまう。これは実は日本語力の低下です。親が子と話をしないといけないのに、本当に親子の関係が壊れてしまった。ちょうど70年安保の頃から、「親と同居せず」という新しいルールが生まれ、家庭環境が変わりはじめた。家族の会話では、会話のパスまわしが出来るようになると思うのですが。

引きこもりの子って辛いと思う。何かが門を閉ざすきっかけになっている。それが学校であったり、大人たちの会話であったり、ささやかな友達のひとりで、こころを閉ざすというほど、実に繊細なのです。こういう人に語彙を与えて、単語力をつけさせたならば、素晴らしい感受性のある何かを残してくれそうな気がする。専門家という人ですら手に負えない世界ですから難しいことです。僕は父とよく話をしました。父親は、悩み事は夜に考えるなどと言った。夜の考えは必ず暗い結果しか出ないから、答えが暗くなるから夜に決めるなど。できるだけ、広い風景を見ながら、天気の良い昼間で考え直してみてください。例えば富士山を薦めるとも言っていました。そんな環境で、悩み事をもう一度考えてみると、まあ～そんな大したことじゃないという気持ちになるから不思議です。風景を見ながら自分の心を慰めることを、僕らの国ほど美しい風景がある国は少ないというほど、手近かな所に森があり、ちょっと行けば山があり、海があり、川があり、美味しい水があり、そして季節があるにも係わらず、なぜ、我々は自分の心を狭い部屋のデスクに追い詰めることばかりして、もったいないと思います。

僕は長崎の人間です。あの町は原爆というものを経験して、戦争に対する感じ方が若干違う。叔母は17歳で被爆して67歳で原爆症で亡くなりました。叔母が言っていました。「人間の心がどんどん新しい武器を持つようになる。その人間の脳をそんな所に使わないような努力をしないといけない」と。その叔母が「この国に、この町に落ちて良かった」と言ったことがあり、僕は愕然としました。「この国が先につくっていたら、他の国の誰かが私と同じ目に合うから、それは可哀そう」と言ったのです。同じような言葉を福島のおばあちゃんからも聞きました。日本人は、ここまで人を思いやることができると思う反面、ひどいことをする人もどんどん増えている。これにどう擦り合わせて行ったら良いのか。これが、これからの私たちの一番大切なもののような気がします。

◇ ♪「献灯会」 ◇

この国の心根というのは、自分の心の中を覗き込むようなもので日本人独特の信仰だと思う。寺社仏閣で、先ず懺悔から入り、こんな駄目な私を今日も元気で生かしてくださりありがとうございますと感謝して手を合わせる。ものごとを裁くというのは難しい。「揚げ足を取る」という言葉がある。相手の言った言葉尻をつかまえ、本質ではない所に怒りを持ってきて、誤魔化すというやり方がある。人と人が話し合うというのは、聞きたくない相手の意見も聞くという責任だと思うのです。批判するのが非常に上手な人が増えてきていて、ストレスのはけ口として、そこを選んでいる。相手が言ってくるのがわかっていて、言いたいことを言う。ですから、パッと批判を浴びた時には、言い返すことはしない。なぜしないかという、言えと言うほど、泥沼に入っていくからです。「物言えば唇寒し」という言葉があります。今話している本質を見ず、自分のストレスだけを吐き出そうとする社会になって来ました。自分の不満、それをぶつける相手を探している人が一杯います。だからこれを乗り越えるのは、自分の許容量しかない。一つだけ言えることは、僕は歌を通じて日本語を誰かに投げている、メッセージしている、その歌にはメロディがある。メロディがあるから、余計なことを言わなくとも伝わる。痛み、切なさとか、恋心だとか、メロディがあまければあまい程、あまい声が伝わって行くし、厳しいメロディであればある程、厳しい怒りは伝わって行く。それを総合的にメッセージするのが、音楽、歌詞のある歌曲という私たちの武器です。ですから、これからは自分が思ったことは、ささやかに表現し、伝わる人には、こんな所まで、さだは考えて言ってくれているのだとわかって貰える所まで書いて言っていくつもりです。

◇ ♪「風に立つライオン」 ◇

「風に立つライオン」は、1987年に発表した歌です。28年経って映画になり、漸く僕の代表曲として認めてくださる方が増え、「風に立つライオン基金」を設立しました。海外で頑張っている日本人のお医者さんや教育者を支援したいという志からはじめたのです。自然災害という毎年つらいことがおきています。沢山の方々がご支援くださるので、「風に立つライオン基金」も頑張って災害の支援活動もやっていこうという所まで育ってきています。この国の心は「褒める心」。褒めるという思いさえあれば、どんな厳しい言葉でも、相手に届くのではないかと思います。

今回、日本語教育のAJALTの公開講座に参加したのは、昨年、エクアドルとの国交100周年記念があり、その時ご尽力くださった当時の小瀧大使、その後の野田前大使のご縁です。国際日本語普及協会は、海外に日本語を普及させよ

う、外国から来てくれる外国人の方にもっと日本語が上手になって欲しいという思いから、日本語普及活動をなさっていると承りました。言葉は心から心に伝える道具に過ぎませんが、この道具をどう使うかは人の腕次第です。古い神道の考え方では、昔は草も木も生きものも、みんな話をしていた。人間がこの国を治めるようになってからは、言葉は人間だけのものになった。言葉は、他の生きものから奪ったのだから大切にしなければ駄目で、ここから言霊という思想が生まれた。こういう思いで一生懸命歌をつくり、歌って参ります。機会がありましたら、またどこかでお会いできるのを楽しみにしております。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さだまさしさんの味わい深く、心ふるえる、美しい日本語の魔力の秘密、そして人の心を引きつけ離さない、豊かな表現力の秘訣が、溢れんばかりの豊かな知見と高い見識の中に散りばめられており、また、その日本語と日本文化についての造詣の深さ、そして、ご本人の素顔とその魅力の本質に圧倒されました。また、「案山子」、「無縁坂」、「関白宣言」、「献灯会」、「風に立つライオン」という至極の歌も、本講座の流れの中でご披露を頂き、多くのお客様が、さだまさしさんの世界に酔いしれた日本語応援宣言の講演会となりました。

以上、盛況のうちに終了いたしましたのでご報告いたします。

(AJALT 公開講座担当委員 大山)
